OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ロシア人捕虜の著書における日本人女性の表象 : Ｆ・クプチンスキーの『おいくさん』を中心に
Author(s)	ガルワーネ, リンダ
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2012, 46, p. 113-130
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/27222
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ロシア人捕虜の著書における日本人女性の表象

── Ｆ・クプチンスキーの『おいくさん』を中心に ──

リンダ・ガルワーネ

キーワード：日露戦争，捕虜，ロシア文学，日本人の表象，混血児

日露戦争に際して、最初のロシア人捕虜は1904年に日本に到着したが、その後、翌年の6月までに、百数十回にわたって、全国29ヵ所に約７万人以上を収容した。日本人の女性と親しくなったロシア人の捕虜は日本全国の各地の収容所で見られ、捕虜の著書でも当然に日本体験の一面として描写されており、文学作品も生んだ。[1)] 松山の妙円寺収容所で収容された捕虜の一人であったフィリップ・クプチンスキー（Филипп Купчинский, 1844 - ?）の1911年に出版された小説『おいくさん』（*О-Ику-Сан*）もその一つである。

『おいくさん』の舞台は松山であり、主人公は道後温泉で働いているおいくという女性であり、彼女とロシア人の捕虜スパーソフ、そしてびあという看護婦の三角関係が物語の中心となっている。スパーソフの所持品からびあとの交換書簡が発見され、彼は留置所に入れられるが、そこでおいくとの間に恋愛関係が生じる。しかし、留置所を出たスパーソフはおいくにも冷たくなる。やがて捕虜はロシアに帰国することになる。スパーソフはびあにも、おいくにも別れの挨拶をせず、ロシアに向かう船に乗るが、おいくは彼を遠くから見送り、悲しみに沈む。

これまでの研究では、文学作品としての『おいくさん』の考察は十分に行われていないのだが、桧山真一は「小説の中の松山」で、Ｆ・クプチン

スキーの生涯や著書に注目し、『おいくさん』のあらすじを紹介し、以下のような観察を加える。「捕虜と日本女性との恋愛というテーマは捕虜の記録の中で、日本女性の好意的観察記録を一番多く書き残しているクプチンスキーにとり大変魅力的であった。淑やかさ、気立てのよさ、心やさしさ、芯の強さ、ひかえめな態度、ひたむきさをそなえたおいくの形象には、クプチンスキーが日本で実際に出会い、観察した日本女性の美点が凝縮されている。」[2] また、桧山は「観察できた日本人女性 ── 道後温泉の湯番女、松山捕虜収容所の看護婦、神戸の芸者から好印象を得ている」[3] とも述べている。さらに、道後温泉に勤める日本人女性とロシア人の捕虜の恋愛関係という設定からは、クプチンスキーの小説は、松山の別の捕虜フョードル・レインガルト（Федор Рейнгард, 1883 – 1947）の『おはなさんの恋』[4] をただちに思い起こさせ、レインガルトの経験を基に、書かれた小説であると桧山は指摘している。[5]

確かに、おいくさんは道後温泉に勤める女性であり、日本の警察によってロシア人捕虜との関係を疑われ、取り調べを受けているなどの点はレインガルトとオハナサンの関係と共通している。しかし、ストーリー展開、登場人物や語り手の特徴などを見ると、『おいくさん』はレインガルトの恋愛物語のクプチンスキーなりの解釈であるとともに、捕虜体験のあるクプチンスキー自身の、日本人女性に対する目線を表現する物語でもある。また、混血児のテーマなど、クプチンスキーの日本人女性の描写は様々な側面を表現しており、日本人女性の優しさへの賛美といったものに単純化することはできない。

本論文では、先行研究で指摘されていることを踏まえ、詳細なテクスト分析することで、フィリップ・クプチンスキーの『おいくさん』における日本女性の表象の特徴やその意味を明らかにしたい。

第一節　日本人女性の優しさや自己犠牲願望の描写

捕虜生活を日本で送った後、帰国したクプチンスキーの著書[6]では戦争がテーマとされ、彼はツァーリをはじめとするロシア人の政治家を否定的に描写したが、『戦争の呪詛』（*Проклятие войны*, 1911）という著書からも分かるように、博愛の重要性を強調し、戦争そのものを批判していた。日本側においてもクプチンスキーは松山市民が「通訳を通してロシア人に寄せる暖かい気持ちを伝えた」[7]と指摘しており、性別を問わず松山市民がロシア人捕虜に優しい態度を取っていたことを伝えている。また、クプチンスキーの『松山捕虜収容所日記。ロシア将校の見た明治日本』（*В японской неволе: очерки из жизни русских пленных в Японии в городе Мацуяма на острове Сикоку*, 1906. 以下『捕虜収容日記』）には、「彼らの献身的な心配りは真の人間愛の現れである。それは神聖にして不滅のもので、キリストの愛と名付けられる」[8]という記述もある。そこで、クプチンスキーが肯定的に描写するのは捕虜に対する日本人医師のキリスト教的な人間愛である。しかし、日露戦争中は成人男子の多くが兵役にとられており、松山市では女性および未成年者の比率が高かったので、捕虜の著書の中では日本人女性の表象がいきおい多かった。クプチンスキーの『おいくさん』も同様である。そのため、『おいくさん』の中で描写されている日本人女性の登場人物を見ると、確かにまず際立つのは桧山が指摘する日本人女性の「淑やかさ、気立てのよさ、心やさしさ、芯の強さ、ひかえめな態度、ひたむきさ」、そしてロシア人捕虜に対する強い愛情である。

> 敵、敵、、、と彼女はひとりごちた。彼らは私たちにすごく怒っているはずだわ。彼らは親戚と離れ離れになり、傷つき、友達を殺された。（中略）でも、私たちはどこが悪いの？　私たちは、ロシア人と戦争

> になることを知っていたかしら？　女性である私たちは知らなかった。知っていたのは、男性であり、彼らはいつもロシア人の悪口を言っていた。[9)]

このおいくの言葉には、日本人女性がロシア人捕虜にどういう考えを抱いたかについてのクプチンスキーなりの解釈が表現されているのだが、実は、それはクプチンスキーの日本人との実際の接触から生まれたものである。『新しい日本』（*Новая Япония*, 1911）の中では、クプチンスキーが神戸で芸者たちの踊りを観たり、そこでハナカツという芸者と会話したりしたことが描写されている。そして、ハナカツは多数のロシア人と会ったことがあり、また彼らは優しく親切な者で、日露戦争を自分の意志で起こしたわけではないというような意見を持っていることなどが書かれている。[10)]

また、『おいくさん』の中で、看護婦のびあはおいくにスパーソフに感じる愛を告白するが、その際に「彼のために自分の人生を犠牲にしたくて、必要ならば、すべて彼にあげたいんです」[11)] と述べている。そして、おいくは留置所に閉じこめられたスパーソフを訪ねる際に、びあと同じく彼を好きになるのだが、びあと同じような激しさでスパーソフに対して愛情を抱く。「そのロシア人のことを ── その人のためなら躊躇もせず、考えもせずに自分の命を喜んで犠牲にできるだろうその善良なロシア人のことを、彼女が熱く強く愛していることだけしか考えなかった」[12)] のである。スパーソフがもうおいくに愛情を感じなくなった際にも、おいくは静かに苦しみを耐え忍び、さらに、小説の結末で、スパーソフが別れの言葉も告げずにロシアに去る場面では、「彼女は何も言わない。静かに我慢して、耐え忍ぶことができるからだ。彼女は彼に小さなお土産を送った」[13)] というようにおいくの態度は描写されている。

本気でスパーソフを愛して、戦争中でも、敵であるはずの捕虜に優しく

接し、なんでも犠牲にしようとする日本人女性の心の広さが肯定的に描写されているのに対し、スパーソフの方は、「愛しているよ、ロシアにも連れて行くよ」などと調子のいいことを言いながら、実はその気もなく、日本人女性を騙すさまが描かれている。また、刑務所から解放された後、スパーソフは道後温泉においくと会いに行くが、そこで働いているトクナガという若い日本人女性を見初めて、その女性に興味を持つようになる。こうして、スパーソフはびあからおいくに、そしておいくからトクナガに興味を移すような、女たらしの男性であり、日本人女性に辛苦をなめさせる男性として造形されている。つまり、クプチンスキーはスパーソフの日本人女性に対する態度を批判的に描いている。それとの対比で、日本人女性は、騙され、苦労する、可哀そうな存在として描かれ、読者にはおいくやびあの方に対する同情が生まれるのである。

しかしながら、クプチンスキーの狙いは、単にスパーソフの非情と日本人女性のけなげさを対比するということではなかった。というのも、日本人女性の自己犠牲願望に対しては、著者は必ずしも全面的に肯定的にとらえているとはいえないからである。スパーソフに対しても、著者の態度は両義的だといえる。

『おいくさん』の日本人女性たちは西洋人を無限に愛し、結局は犠牲となるわけだが、このような設定は、ジョン・L・ロング（John Luther Long, 1826-1927）の『マダム・バタフライ』（*Madame Butterfly*, 1898）以来、欧米人の著作の中で表象されてきた、西欧人に対して強い愛着を表す日本人女性像を想起させる。もっとも、『おいくさん』では、おいくはロシア人の捕虜と会った後ではなく、会う以前から彼らに対して愛情を感じている。

スーザン・レイトンが指摘するように、ロシア人はチェルケス女性を「山のおとめ」と称し、プーシキンのものもふくめ、18世紀以降のロシア文学作品ではしばしばそのような女性が登場したが、そのような女性は

例外なく、ロシア人の男性と言葉を交わす以前から、ロシア人に興味を持ち、現地の男性には興味を持たないで、ロシア人男性に対する愛を誓って、最終的には自殺して、わが身を犠牲にする。[14] クプチンスキーの『おいくさん』では、日本人女性は自殺しないが、ロシア人の捕虜と会う前から、彼らに愛してほしいと思い、自分は犠牲になりたいと思っている様子が見られ、それは18世紀のカフカス地方との女性とロシア人の関係をひな形にしているといっていいだろう。

ロシア人によるカフカス地方の女性の描き方は当時のロシア帝国の植民地開拓者としての優越感を表現しているのは言うまでもない。それに対し、日露戦争時代には、ロシア帝国はもちろん侵略者ではなく、むしろ敗北者の立場にいた。それにもかかわらず、捕虜が表象した日本人女性に対する視線にはロシア人、すなわち西洋人としての優越感が見られる。

第二節　『おいくさん』における人種・民族性の描写

「ロシア人とは何者であろう」とおいくは繰り返し自問する。「彼ら[ロシア人]はとても大きくて、イギリス人のような白い髪の毛をしている、、、」[15] というロシア人の外見の特徴もおいくがロシア人を見る前に他の日本人から聞いたロシア人の特性の描写である。したがって、このような、ロシア人の民族的特徴の一般化は、クプチンスキーが想像したところの、ロシア人に対する日本人の見方でもある。つまり、ロシア人はイギリス人と同じであるという日本人の見方が紹介されるが、これはひいては日本人にとって西洋人がすべて同一である ── 西洋人が〈東洋人〉を十把一絡げにするように ── というクプチンスキーの見方を示しているのだろう。そして、これはすべてクプチンスキーが考えるところの、日本人のロシア人観なのである。したがってここにはロシア人の自己表象も表現されているといえよう。

ロシア人捕虜の中には、ロシア帝国の民族多様性のため、スラブ系の兵士だけがいたわけではなかった。クプチンスキーの『捕虜収容所日記』の中では、兵隊の地位によって、捕虜の生活状況が異なった上、「捕虜のポーランド人とユダヤ人は、最初からロシア人捕虜とは分離されていた。他の兵隊より比較的いい宿舎が提供された」[16] という記述から分かるように、民族によっても待遇が違ったことが分かる。ロシア兵の民族的、そして宗教による多様性、またそこから来る言語や習慣などの違いのため、収容所では様々な問題が起こった。日本人も、〈ヨーロッパのロシア人〉とシベリアに住んでいたロシア人の違いや彼らの関係の違いに気づき、捕虜を分離したと島津直子は指摘する。さらに、当時の日本におけるロシア人の人種をめぐる言説を見ると、日本人は日露戦争を未開の白人対文明化した黄色人の争いとして見なしただけでなく、[17] 日本におけるロシア人のイメージはアングロ・サクソンによるロシア人イメージから強い影響を受けていた。[18] ロシア人は半分黄色人というような意見もあった。そのような見方は、アングロ・サクソンだけでなく、フランス人の作家クロード・ファレール（Claude Farrère, 本名Frédéric-Charles Bargone, 1876 − 1957）の小説『戦闘』（*La Bataille*, 1909）の中でも見られ、日露戦争期において、西欧人がロシア人を未開なアジア人であるととらえた一例として知られている。日本人は、ロシアを含め欧米では黄禍として見なされたことをもちろん否定ができない。しかし、他方で、日本は白色人種と黄色人種の仲介者になりうるというような見方もあった。[19]

『おいくさん』では、おいくは他の日本人からロシア人捕虜について聞いたことを思い出す際に、ロシア人は残酷な野蛮人である[20] という日本人のロシア人についてのイメージを語っているが、一方、ロシア人の外見ついていえば、クプチンスキーはそれを完全に〈ヨーロッパのロシア人〉という描き方でとらえる。スパーソフはまさにその典型である。

日露戦争が始まった際にロシアの極東に派遣された[21] クプチンスキーがロシアの民族的・宗教的・文化的の多様性を知らなかったわけはない。そして、クプチンスキーの日記の中ではロシア人の間の内なる相違点が指摘されている。それにもかかわらず、『おいくさん』ではロシア帝国の民族的な多様性は完全に無視されており、〈ヨーロッパ人であるロシア人〉として描かれている。クプチンスキーのとっての〈人種的に白人〉という特徴の重要性はスパーソフの外見の特徴にだけでなく、おいくというの登場人物の描写にも現れる。

おいくさんは、実際にはありえない「生き生きした優しい青い目をした」[22]、つまり、日本人と外国人の混血であるかもしれないというような女性であるのだが、このような日本人女性の表象は重要な意味を持つ。

> 日本人も欧米人も彼女[おいく]を美人だと思っていたが、これは珍しいことだ。なぜなら、女性の美に関して日本人と欧米人の感覚は全然違うから。おいくさんは体つきがよくて、これも珍しかった。大抵の日本人女性の体つきが悪くて、少し猫背だから。[23]

上記の引用から分かるように、クプチンスキーは日本人と欧米人の女性の美に対する感覚の違いに注目するが、ここでは日本人と欧米人の美の違いが説明されているとともに、全体としては、日本人女性はきれいではないということが暗に含意されているわけで、日本人女性の外見に対する蔑視とも見られる。

おいくは自分の外国人であった父親を知らず、日本で育ったのだが、混血児であるため、よそ者扱いをされてきた。そのため、彼女は欧米人にある程度の親近感を感じ、外国人と仲良くし、また、彼らを日本人より高く評価しているようにも見える。しかし、以下の引用から分かるように、おいくは実は心底では日本人の方が好きなのである。つまり、おいくは見た

目は完全な日本人ではないのだが、心の中では日本人であることが暗示されているのである。

> 確かに、日本人としてのおいくさんは心の底で日本人の方を好きであったかもしれないが、自分の国の人より、欧米人の方を良いとし、彼らのためにもっと優美で特別な服を着た。女友達がおいくのことを馬鹿にしたときに、彼女はこう言った。
> 「欧米人の趣味はより繊細で、よりデリケートだ。欧米人の方に好きになってもらうのはもっと難しい。彼らは日本人より要求が多いが、私たちはもちろん気に入ってほしい。」[24)]

こうして、おいくの口を借りて、外国人の方が日本人より優越であるということをクプチンスキーは小説の中に書き込んだのだが、おいくの外国人好きはある意味で偽物であることが描写されている。しかし、ロシア人スパーソフに関しては、おいくは本当の愛情と自己犠牲の願望を感じるのである。日本人女性はほかの外国人はともかく、ロシア人男性の魅力には惹かれずにはいられない。そのため、スパーソフによって象徴されるロシア人捕虜は特別な位置づけをなされているといえ、欧米人の中でのロシア人の優位性が強調されているのである。

第三節　ロシア人捕虜の限られた自由や道徳

ここで改めてスパーソフの否定的な描写に戻りたい。

スパーソフがある程度、否定的な登場人物であると上記に指摘したのだが、「彼女から激しい悲しさが吹き流れてきて、そのため彼女を押しのけることができず、彼女に対して優しい気持ちと憐みを感じた」[25)]というように、おいくの苦労に同情感を示しているスパーソフの様子も描かれている。また、「ここ留置所では、おいくさんは彼にとってこの世の中で一

番いい女性のように思えた」[26] となっていることから分かるように、スパーソフがびあからおいくに興味を移すことは留置された期間であったことが明示されている。同じことは、スパーソフが留置所から解放され、おいくに冷たくなる場面でも分かる。それまでなぜおいくのことを高く評価し、興味を持ったのかとスパーソフは自分の中で答えを探そうとするが、それはやはりおいくが優しかったことと、留置所では彼女以外に誰もいなかったためであるとスパーソフは分かる。[27] つまり、クプチンスキーは、スパーソフがおいくに興味を持つようになった理由として、スパーソフが限られた空間の中で孤独であったためであることを小説の中に示している。しかし、もっと広い観点からとらえるならば、スパーソフがびあやおいくに興味を持った理由は、「日本」という限定された空間に閉じ込められていたからだともいえるだろう。だからこそ、ロシアに捕虜がロシアに帰れるようになった時に、スパーソフにとって彼に対するおいくの「感情は興味、重要性や意味を失った」[28] のである。つまり、クプチンスキーは、日本人女性は可哀そうであるのに対し、捕虜はわがままで女たらしであると描くことで捕虜に対する批判を表現するのだが、一方で、捕虜がそういう態度をとらざるとえないことを、捕虜の生活の事情 ── 自分の家から遠く、孤独で、退屈であること ── に鑑みて弁護しようとして、彼らが日本人女性の中で優しさを求めたり、彼女を性的な対象にしたりしたことに免罪符を与えようとするのである。

クプチンスキーの『捕虜収容日記』を含め、ロシア人捕虜の著書を読むと、捕虜の生活の苦労の中で繰り返し強調されているのは不自由や退屈さである。松山市に収容された捕虜にとっては、クプチンスキーが指摘するように、道後温泉は「捕虜にとって唯一の快楽」[29] であった。それが快楽だったのは、レインガルトが『お花さんの恋』の中でも示しているように、道後温泉でお風呂に入ったり、ビールを飲んだりできたためでもある

が、何よりもそこで日本人女性と普通に会話ができ、捕虜であっても比較的に自由を感じ、退屈さから逃れることができたためであろう。[30] そして、「ことに一年以上も女と同席したことがないのでこの時自分は非常に愉快を感じたのである」[31] というレインガルトの記述から分かるように、道後温泉の女性たちは日本人捕虜の性的な対象ともなっていた。

そのようなことは『おいくさん』でも描写されている。スパーソフが留置所でおいくと二人きりになる時には、「彼は彼女の手を優しく掴んで、引き寄せて、硬くて低いベッドに座って、膝に乗せ、彼女が彼と一緒にいることを喜んで、冗談を言ったり、目や頬っぺた、唇にキスしたりした」[32] という描写から分かるように、スパーソフとおいくの関係の性的な側面が強く暗示されている。さらに、「欲情して彼女の顔に息を吹きかけた時に、彼女はとても気持ちがよくて、とても幸せを感じた」[33] という描写を見れば、おいくもスパーソフに対して熱い性的好意を寄せていたことが分かる。つまり、日本人女性を性的な対象にし、そしておいくのスパーソフに対する欲望を仄めかすことで、クプチンスキーは『おいくさん』の中で捕虜として限られた自由や空間 ── 病室、刑務所、そしてさらには広い意味で「日本」 ── の中で、捕虜と日本人女性の関係のエロチックなファンタジーを作り上げている。

第四節　性的な対象として描写される日本人女性と転覆される力関係

ロシアを含め、西洋では性的な対象とされてきたのは特に芸者である。クプチンスキーも神戸で芸者たちの踊りを観たり、会話をしたりした。『おいくさん』でも芸者への言及がある。[34] しかし、『おいくさん』の中では、捕虜は道後温泉の〈ムスメ〉が芸者ではないと分かった後、「ムスメたちを肉欲に満ちた目で見て、穏当とはとても言えないような意見をお互いに交換したのである」[35] とされる。つまり、捕虜が特に興味を起こし

たのは、金銭的な関係をまったく伴わない一般的な日本人女性である。

クプチンスキーが利用したと思われるF・レインガルトの著書の中では、オハナサンという実在の女性との経験が描かれており、オハナサンと文通したため、二人とも逮捕され、留置所に閉じ込められた。しかし、『おいくさん』では、捕虜と文通したのは二人の女性、看護婦のびあと道後温泉のおいくである。つまり、クプチンスキーはレインガルトの恋愛関係を道後温泉の女性と看護婦という二人の登場人物に割り振ったのである。クプチンスキーが最も高く評価し、日本人女性の中で肯定的な例外であると思ったのは看護婦であるのだが、[36]『おいくさん』を見ると、二人の日本人女性が〈看護婦〉の役割を果たしているといえる。おいくはスパーソフの身体の世話こそしないが、留置所にスパーソフを見舞い、彼の捕虜としての孤独をいやすことによって、ある意味で〈精神の看護婦〉として振る舞うのである。道後温泉の女性はみなそのような機能を果たしていた。

ジョン・ダリーが指摘するように、男性が看護婦に介護されることで、男女の力関係は転倒する。看護婦は力や権威を持ち、男性の患者は無力であり、男性らしさを失う。力関係や男性らしさを元に戻すために男性は看護婦に挿入することを夢想する。[37]看護婦が男性のファンタジーの中で性的な対象となることは文学作品の中でも広く描写されている。

ロシア人捕虜の場合を考えると、日本人女性が、戦場で負傷したロシア人捕虜を介護した看護婦であれ、精神的トラウマをいやした〈精神の看護婦〉であれ、ロシア人の捕虜は敵国の女性達の慈悲に自分をまかせるしかなかった。つまり、介護者は敵国の女性であったと考えれば、ロシア人捕虜は介護されるものであり、男としても兵士としても権威を失うことになった。そこで性的ファンタジーによる、男権の回復が必要となったのである。しかし、捕虜がお金で日本人女性を買ったり、暴力的に性行為を行ったことをクプチンスキーが小説の中で描写したならば、西洋人、兵

士、男性としての自尊心を戻すことができなかったであろう。そのため、日本人女性が捕虜を好きになり、自分の意志でロシア人捕虜と関係し、最終的に苦労するならば、力を失ったロシア人捕虜は自分の優越性を回復し、日本を〈罰する〉ことができる。つまり、クプチンスキーは捕虜と看護婦の役割を果たす一般的な日本人女性の関係を描写したことで、日本で捕虜になった結果として失った自尊心、さらに男性としての自尊心を積極的に元に戻そうとしたことが分かる。

だが、クプチンスキーがおいくを〈純粋な〉日本人としてではなく、混血児の登場人物として作り上げたことを考えると、彼は男性としての自尊心を取り戻すことができたが、西洋人としては、そして日露戦争に敗北者になったロシア人としては自尊心を回復することはできなかったのではないかという見方も可能であろう。

クプチンスキーの小説を見ると、びあが回想的にスパーソフとの関係を思い出す場面、そして彼女の発言を見ると、びあとスパーソフの関係はおいくとスパーソフの関係と同じようなパターンで展開したと想像される。また、おいく以外にも、捕虜は道後温泉の女性たちをひろく性的な対象としたことにもすでに注目してきた。しかし、おいくという混血児との場合に限って、スパーソフの関係の性的な側面が強調されている。つまり、クプチンスキーは、西洋人としてのロシア人と〈純粋な〉日本人女性の性的な関係が不可能であることをほのめかしているのではないかと思われる。おいくが混血であることは西洋人の興味を起こすだけでなく、〈異人種の性的な関係〉を可能にする装置ともなっている。

興味深いところでは、『おいくさん』にはクプチンスキーのテクストに彼の妹が描いた挿絵が挿入されているのだが、その挿絵に描かれたおいくには、混血児の特徴が欠けており、おいくは完全に日本人女性として描写されている。そのため、読者の視覚に影響を及ばすのは、苦労して、泣い

ている日本人女性のイメージである。こうして、おいくは、文章上では青い目をした西洋人のように見え、日本人のアイデンティティーを持つ混血児であり、そして挿絵上では日本人であるというハイブリッドな登場人物として作り上げられている。挿絵の描き方においては、作家のクプチンスキーの意見がどの程度、取り入れられているのかは不明だが、クプチンスキーは自らの小説を、妹の方は自分が描いた挿絵を、さらに別の姉妹のヴェーラに献呈したのである。『おいくさん』は、このように、おいくさんを日本人として描いている挿絵とともに出版されたのだが、このようなとらえ方が作者の意に沿わないものであったなら、クプチンスキーはその出版を認可しなかっただろうと思われる。挿絵上でおいくが日本人であることが作家の意図に反していたかどうかは断定できないが、いずれにせよ、1911年の刊行の版を見るかぎり、おいくは混血児として描かれており、そのことによって西洋人と日本人の性的な関係は可能になったのである。ここにはロシア人の人種的偏見が露呈しているといえる。さらに挿絵に日本人として描かれたおいくはロシア人の捕虜に〈罰された〉という結果になり、ロシア人の読者も日本人女性の悲しみをサディステイックな快楽を感じながら、眺めることができたのであろう。

注

1）伊藤信哉・宮脇昇「松山捕虜収容所の概要」『松山の記憶 ── 日露戦争１００年とロシア兵捕虜』（成文社、2004）10頁。

2）桧山真一「小説の中の松山」『松山の記憶 ── 日露戦争１００年とロシア兵捕虜』（成文社、2004）119頁。

3）同書、115頁。

4）レインガルトは捕虜生活の記録として帰国後、『少なき歳月の数多き体験』（*Мало прожито, много пережито*, 1907）を出版したが、その中には彼とオハナサンという日本人女性の関係が描かれており、日本では注目された。この本は『旅順・松山の歌』という表題で邦訳されている（新時代社、1974年）。

その一章が「お花さんの恋」であるが、桧山はこれを「おはなさんの恋」と言及している。なお、この訳書中の本文では、「オハナサン」という片仮名の表記が採用されており、本稿ではその表記にしたがう。

5）前掲、桧山真一「小説の中の松山」119頁。

6）例えば、*Порт-Артурские "Герои"*（1907）と *Герои тыла*（1908）。

7）F・クプチンスキー『松山捕虜収容所日記。ロシア将校の見た明治日本』（中央公論社、1988）118頁。

8）同書、191－192頁。

9）Купчинский, Филипп. *О-Ику-Сан.* Москва: Орион, 1911, стр.16. 日本語訳や傍線は執筆者による。以下同様。

10）Купчинский, Филипп. *Новая Япония.* Санкт-Петербург: Посев, 1911, стр.228.

11）前掲、Купчинский, Филипп. *О-Ику-Сан*, стр.38.

12）同書、стр.51.

13）同書、стр.141.

14）Layton, Susan. "Nineteenth-Century Russian Mythologies of Caucasian Savagery." In: Eds. Daniel R. Brower, Edward J.Lazzerini. *Russia`s Orient. Imperial Borderlands and Peoples, 1700-1917*. Indiana University Press, 1997, p.87.

15）前掲、Купчинский, Филипп. *О-Ику-Сан*, стр.15.

16）前掲、F・クプチンスキー『松山捕虜収容所日記。ロシア将校の見た明治日本』164頁。

17）Shimazu, Naoko. *Japanese Society at War. Death, Memory and the Russo-Japanese War.* New York: Cambridge University Press, 2011, pp.161－163.

18）同書、p.167.

19）Wilson, Sandra; Wells, David. "Introduction." In: Eds. David Wells and Sandra Wilson. *The Russo-Japanese War in Cultural Perspective.* Houndmills, Basingstoke; New York, NY: Palgrave Macmillan, 1999, p.17.

20）前掲、Купчинский, Филипп. *О-Ику-Сан*, стр.15.

21）前掲、桧山真一「小説の中の松山」109頁。

22）前掲、Купчинский, Филипп. *О-Ику-Сан*, стр.9.

23）同書、同頁。

24）同書、同頁。

25）同書、стр.119.

26）同書、стр.49.

27）前掲、Купчинский, Филипп. *О-Ику-Сан*, стр.60.

28）同書、стр.139.

29）前掲、F・クプチンスキー『松山捕虜収容所日記。ロシア将校の見た明治日本』116頁。

30）フヨードル・フォン・レンガート「お花さんの恋」『旅順・松山の歌』（新時代社、1974）270頁。

31）同書、同頁。

32）　前掲、Купчинский, Филипп. *О-Ику-Сан*, стр.50.

33）同書、стр.51.

34）『おいくさん』では、ロシア人捕虜が勘違いして、道後温泉で食事する際に、仲居の女性を「芸者」と呼ぶシーンがあり、ロシア人捕虜一般は、芸者がどんな者なのか日本に行く前には全く知らなかったことが描かれている。

35）前掲、Купчинский, Филипп. *О-Ику-Сан*, стр.23.

36）前掲、F・クプチンスキー『松山捕虜収容所日記。ロシア将校の見た明治日本』166頁。

37）Daly, John. *Professional Nursing: Concepts, Issues, and Challenges*. New York, NY: Springers Publishing Company, 2005, n.p.

（大学院博士後期課程学生）

SUMMARY

The Representation of Japanese Women in the Writings of Russian Prisoners of War: Philipp Kupchinskii's *O-Iku-San*

Linda GALVANE

The first Russian prisoners of war were sent to Japan in 1904, followed by more than seventy thousand POWs in camps all over Japan by the end of June next year as an outcome of the defeat of Russia in the Russo-Japanese War. Not infrequently the Russian POWs developed intimate relationships with Japanese women, which subsequently became a subject of literary works. One of such cases is a novel *O- Iku-San* (1911) by Philipp Kupchinskii, a POW who was interned in the Matsuyama prison camp. Hiyama Shinichi points out that the heroine O-Iku embodies all the positive characteristics of Japanese women, especially kindness and perseverance that Kupchinskii admired. The novel was homage to Japanese women by a Russian POW.

In this paper, however, I argue that one should not reduce *O-Iku-San* to a mere praise for Japanese women and that this novel needs a more detailed historical/cultural examination. I suggest that the depiction of the relationship between Japanese women and the Russian POW Spasov, in whom O-Iku falls in love, is a tacit means to regain self-respect, pride and masculinity of the Russian soldiers, lost during the warfare and their imprisonment. My argument may be supported by the following four points.

Firstly, I show how a seemingly positive depiction of Japanese women who love Russian war prisoners and are ready to sacrifice themselves, actually, neatly fits in the discursive tradition of Russian literature. Namely, it is the reproduction of the representations of "Caucasian maids."

Secondly, all the POW authors in the final analysis acknowledge in their works Russians as Aryans, demonstrating the biased attitude towards people of non-Caucasian origins. Moreover, I contend that the

representation of O-Iku-San as of a mixed Japanese and Western origin is a textual strategy to discriminate Japanese and to reestablish the superiority of Russians.

Thirdly, through the characteristics of Russian POW Spasov depicted in the novel, Kupchinskii surreptitiously justifies the wantonness of Russian men as regards Japanese women. In fact, the novel, I would argue, reveals the erotic fantasy of POWs, where Japanese female characters play the role of "nurses," to whose mercy helpless POWs are left. However, depicting how these Japanese "nurses" desire Russians and suffer afterwards, Kupchinskii eventually subverts the power relationship between them and POWs. That is, by "penetrating" the Japanese women in their fantasies, Russian POWs regain the superiority and masculine confidence.

Finally, referring to the visual representation of O-Iku-San, I point out that the hybrid image of mixed race character in the novel serves as the justification for interracial relationship, which, however, is betrayed by the visual image of a suffering Japanese, which would give the Russian readers sadistic pleasure and feeling of superiority.